

地震がお知らなくて来たもの

高柳中学校 一年 小林 将大

がうかう、が夕か夕ゴトゴト、大きなたてゆれがおこった。民の時は僕が病院にいた。その後者、医師の方で看護学校の先生たちに来て、僕たちを少しだけ安心させてくれた。部屋に戻ると、閉めたはずのドアが大きく開き、より地震のゆれの大きさとものかたつていた。病院は自家発電所があったので、電気は確保できたが、たいがいには生命維持装置をストップしている人のために使う。と言われ、暗いところを恐怖と不安の中ゆくり歩いていった。すると、突然また大きなゆれがきて、僕はそのうかの手すりにしりとりかまつた。ゆれがおさまると、さつきより多くの物が飛び散り、乳母たちが泣きわめいていた。その後、ドットを一つの部屋に移動させ、大勢で寝るよりに看護師の方が言い、僕たちは大勢で寝るようになるはずはない存在を過ぎました。

た大きさをゆれがおそってきかた。ゴットはゆれ
動さ、ねていたのだあまり身動きもどきず、
暗い中僕たちばかり、大きさを不安と恐怖につ
つまれた。その後、何時間、何十分たつた
ろうか、ふと家のことと思つた。さつき、
うかお歩いているときた貝たテレビでは、僕
の住んでいる町は震度五強を観そくしていた
ことを思い出した。その時、僕は大きさを不安
におそわれた。自分の家が倒壊したかもしら
ない。し思うと余計に不安におそわれ、寝お
れをかた。

翌日のテレビを見るし中古志や小市念市の
倒壊した様子を書つていた。それを見よと余
計に不安になり、恐怖も憶ふた。その後、
護師の方が電話をして面白いとき、つくられた
ので、僕は早くさま家に電話し、家族の無事
を祈つた。すると、母が電話にでてくれ、
僕はあつた。今回、今回の地震では、僕の家の
家族は無事だ、たけおで、他の人は家や学校
の人が壊れたり、奇くなつてしまつたとい

人も大勢いた。僕はこの時、あのおそろしか
つた地震が僕にあるこゝを奪ふ直させてくれ
たと思つた。それは、家族は大切だ。というこ
とだ。今までには家族かいては何もおもわす
た。ただだ普通に生きてきた。しかし、この地
震を通して、家族は改めて大切だ。というこ
とがわかり、よかつたと思つた。
地震。それはいつ何時何分におこるかわか
らなく、それがあきた時には大さな不安と恐
怖が来さつてくる。しかし、このおそろしい

地震が時に人に何かをお知らせし、考え直さ
たりさせるものだと僕は思ふ。